

日本の大学における日本語教育

池田 伸子

1. はじめに

1980年代初めに日本政府が立てた留学生10万人計画が最近やっとその目標を達成した。しかし、日本国内においては、日本語を母語としない人に日本語を教える「日本語教育」や日本の大学や研究所で学んでいる留学生に対する認知度はまだまだ低い。

立教大学でも、入学試験を受けて各学部で学ぶ正規留学生や、協定校から来て半年から1年半という短期間立教大学で学ぶ特別外国人学生などが学んでいるが、彼らがどのような日本語教育を受けているかについては、あまり知られていないのではないだろうか。

そこで、今回は、立教大学で行なわれている日本語教育について広く知ってもらうために、現在行なわれている日本語教育の概要と、将来に向けての取り組みを紹介したいと思う。

2. 日本の大学における日本語教育

日本国内の大学で行なわれる日本語教育が、日本国内の大学で行われる英語やフランス語、中国語などの他の言

語教育と最も異なるのは、学習者が置かれている環境である。日本国内の大学で日本語以外の言語を学習する場合は、教室を一步出ると学習している言語を使用する機会はほとんどない。しかし、日本国内の大学で日本語を学習している留学生は、教室を出ても、日々の生活の中で常に日本語に触れている。つまり、留学生は、教室の中でだけ日本語を学んでいるわけではない。彼らは、日常の生活を通して日本語や日本文化を体験し、その体験を通して多くのことを学んでいるのである。

このように書くと、日本の大学で学ぶ留学生は、非常に恵まれた環境で日本語を学習しているように思われるかもしれない。しかし、現実には少し違っている。日本の大学で学ぶ正規留学生の場合、その多くは大学での勉強とアルバイトに追われている。さらに、大学生活の中でも、日本人学生との交流がそれほど活発であるとはいえない場合が多い。また、短期の留学生の場合も、それほど幅広く日本人や日本社会と交流を持つ者は少なく、教室外で日

本語をほとんど使用することがない学生もゼロではない。つまり、彼らは日本語が使用されている環境には置かれているけれども、その環境との関わりは必ずしもうまく行なわれていないのである。

このような状況の中で、今、日本の大学における日本語教育に求められるのは、留学生のニーズに合った日本語教育を授業で提供することと同時に、留学生が授業で学んだ日本語を使って、授業外で日本社会や日本人学生と幅広く交流ができるような体制を整えていくことだと思われる。その2つが実現できて初めて、留学生にとって効果的で意味のある日本語教育が提供できたということになるのではないだろうか。

3. 立教大学の日本語教育の現在

立教大学の日本語教育プログラムでは、留学生が言語としての日本語の学習と日本の社会や文化についての理解を相互補完的に行なっていくことができる体制を整えることを目指している。この目標を実現するためには、国際センターや地域社会との積極的な連携が不可欠ではあるが、そのためにはまず、日本語教育研究室が教室内学習を教室外での体験、学習に結びつけるための日本語カリキュラムの改善や教材開発を行なっていく必要がある。そこで、今回は、日本語教育研究室としてどのようにカリキュラム改善や教材

開発に取り組んでいるのかについて紹介したいと思う。

(1) シラバスデザインの整備

A：正規留学生

立教大学で学んでいる正規留学生は、1年から2年の日本語学習の後に、日本語能力試験あるいは日本留学試験を受験し、立教大学の入学試験に合格した学生である。そのため、彼らは日常生活に必要な日本語能力は既に習得しているが、レポートや論文の作成やプレゼンテーションの方法については学習していない。そこで、正規留学生に対する日本語カリキュラムでは、彼らが立教大学での学習、研究生活で求められる大学生生活に必要な日本語（アカデミック・ジャパニーズ）を学習できる授業を提供している。そこでは、1年次には「レジユメの作り方」、「パワー・ポイントなどの機器を使ったプレゼンテーションの仕方」、「レポートや論文の構成」、「口頭発表のマナー」などについて具体的な指導が行なわれ、2年次ではグループ・ワーク等も取り入れて、実質的な授業を展開している。

正規留学生のための授業では、「スキルや知識」として授業で提供したことを学生が理解した後は、学生が教室外での活動（アンケート調査や文献検索）を通してそれを実践していく構成をとり、一人一人の学生が授業の外で学んだ知識やスキルを自分の体験を通

して習得していけるようにしている。

また、入学時に日本語能力の低い学生に対しては、1年の前期に特別なケアのための授業を行い、集中的に手当てを行なっている。

B：特別外国人学生

留学期間が短く、学生の日本語能力もひらがなも読めないゼロ初級から日本人と同じ講義が受けられ、日本語でレポートが書ける上級までと幅広い特別外国人学生に対しては、J1（ゼロから初級前半まで）、J2（初級後半）、J3（中級前半）、J4（中級後半）、J5（上級）という5つのレベルで、学習者の日本語能力に応じた日本語教育を展開している。J1からJ4までは、「文法・文型」、「漢字・作文」、「読解」、「聴解・会話」という日本語の授業が展開されており、J5では、「論文作成法」、「日本語の諸相」、「日本文化・社会」というように、日本語という言語の授業ではなく、さらに幅広い内容の授業が行なわれている。

立教大学の日本語カリキュラムで特徴的なのは、J3、J4にも「文法・文型」の授業があること、「読解」と「作文」を別々の独立した授業として提供していることである。通常、日本の大学で行なわれる日本語カリキュラムでは、中級になると文法や文型を独立した授業としては行わず、読解や聴解の中に取り組みでしまう。しかし、大学生として知的な日本語を書いたり、話した

りするためには、中級以上でもしっかりとした文型を提示することは必要である。さらに、文型や語彙の導入のための読解ではなく、しっかりとした「読み」のスキルを提示するような授業も必要であり、同様に「読んだものについての感想を書く」的な作文授業ではなく、段落構成の段階からきちんと学べる作文授業も必要である。このような考え方に基づいて、立教大学の特別外国人学生のための日本語カリキュラムは、前述のような構成をとっているのである。この構成を始めてから、まだ1年であるが、各授業の教材が充実してくれば、必ず効果が現れてくると思われる。

(2) 教材開発

現在、日本語教育研究室では特別外国人学生用の教材を開発中である。J1、J2用の教材は、昨年度から試用、改善を行なっており、J3、J4用の教材についても来年度には試用版ができる予定である。

特別外国人学生の多くは、知識として日本語を学びたいのではなく、日本人学生との交流や日本文化、日本社会の理解のために日本語を必要としている。そのため、立教大学の日本語テキストでは、市販されている日本語テキストとは異なる特徴を持っている。そこで、ここでは、現在試用しているJ1、J2用のテキストを紹介しようと思う。

メインテキスト

(J1:Lesson1-10, J2:Lesson11-20)

★各レッスンの構成：語彙、文法説明、
読解、作文、聴解、会話、コラム

★語彙：各レッスンのトピックごとに有用だと思われる語彙を豊富に提示してある（各レッスン100～150）。しかし、それらの語彙を最重要語彙、重要語彙、関連語彙という3段階にランクづけを行い、学生が自分の必要に応じて覚える語彙をコントロールできるようにしてある。また、テキストで提示されているすべての動詞と形容詞に絵をつけて、学生が自習用に使えるようにしてある（これらの絵はコンピュータ教材と同じ絵になっている）。

★文法説明：市販されている日本語のテキストとは異なり、形容詞文（Lesson2）や動詞文（Lesson3）が非常に早い段階で提示してある。それらのレッスンでは、「おいしい、難しい、寒い、高い、安い」などの基本的な形容詞や、「食べる、寝る、行く、休む」などの基本的な動詞も提示されているため、学生は非常に早い段階からそれらを使って日本語の文を作ることができる。また、授業時間を有意義な活動にできるだけ使いたいという思いから、通常市販されている初級用のテキストのよう

に、文型練習のためのドリル問題を意図的に含めず、学生が文法事項を理解できたかを自分でチェックするための最小限度のチェック問題を各文法事項説明の後ろにつけるにとどめた。こうすることで、学生は教室で学んだ文型を教室内あるいは外の様々な活動を通して体験する中で身につけていける構成にしたのである。もちろん、新しい文型が定着するためには繰り返しの練習も必要であるが、それはコンピュータ教材を利用することで補っている。また、日本人の学生との交流を考え、通常は初級後半で提示される普通体（～だ）をLesson2の段階で提示し、「～です/～ます」のみでなく学生が使うようなカジュアルな日本語にも配慮してある。

★読解：文章中に知らない語彙があっても読み進めていける能力をつけさせるために、早い段階から長い文章を読ませるようにしてある。そのため、読解教材中の語彙すべてに語彙リストをつけることはせず、学生に積極的に辞書の使用を促している。

★作文：初級の作文は、学習した文型を使った単作文の練習に終始してしまいがちであるが、開発している作文教材は、早い段階から400字から600字のバラグラフ作文を書かせる構成になっている。「起承転結」や

「序論、本論、結論」などの構成を学び、そのような構成で作文を書いていく練習をする中で、日本語の接続詞や文章で使われる日本語表現などを学習していけるようにしてある。

★聴解/会話：生きた日本語の聴解練習のため、自然な会話を教材として使っている。また、会話では、教室の中のみでなく、教室の外で日本人や日本社会に触れ、そこで日本語を使用し、学生がそこでの体験を通して日本語の運用能力を身につけ、日本語以外の何かを学ぶことができるような活動を多くすることで、日本で日本語を学習するメリットを学生が感じられるよう工夫している。

〈漢字テキスト（ひらがな、かたかな、漢字）〉

J1, J2 段階で約 450 の漢字が学習できるようになっている。非漢字圏の学生にとっては、漢字学習は負担が大きいため、学生が覚える語彙数をコントロールできるようにしてある。また、授業としては漢字の「書き」習得は要求せず、「読み」と「認識（正しい漢字が選べるかどうか）」のみを要求している。

〈コンピュータ教材〉

テキスト準拠の文法ドリル、漢字読み・認識ドリル、語彙ドリルの3種類

のコンピュータ教材がそろっており、学生は自分のペースでそれらを自習していくことができる。現在はまだ、コンピュータ教室のみでの利用に限られているが、来年度からはインターネット上で運用可能にし、学生がいつでも、どこからでも利用できるようにする予定である。

これらの教材は現在はまだ試用の段階ではあるが、J1 から J4 までの教材が完成すれば、ゼロ初級から中級後半までの一貫性を持った教材がそろい、特別外国人学生に対してより充実した日本語の授業が提供できると思われる。

4. 立教大学の日本語教育の課題

(1) 教室外における留学生の日本語学習の促進

前にも述べたように、立教大学の日本語教育は、学生が効率的に必要な日本語を学習することができる授業を提供することと同時に、学生が授業で学んだ日本語を教室の外でより多く使い、日本人や日本の社会と交流をする中で、学生が生きた日本語や日本文化、日本社会について学んでいける体制を整えることを目指している。そして、そのためには、学生の教室外活動を促すような課題を積極的に授業に取り入れることが必要である。しかし、そのような課題をただ増やせばいいというわけではなく、整備された一貫性のあ

るシラバスの上に、そのような課題を組み込むことが重要である。今後も日本語教育研究室は、この点についてより努力を重ね、特別外国人学生用教材のみでなく、正規留学生用の教材も充実させていかなければならないと思っている。

また、留学生の教室外における日本語学習を促進し、支援するために重要な役割を果たすのは、彼らの周りの日本人である。特に、チューター（留学生の日本語学習や生活面の支援をする学生）の果たす役割は大きい。正規留学生の場合は、日常生活に必要な日本語能力は備えているため、卒業論文や修士論文の作成などの場合以外では、それほど日本語学習支援の必要はないかもしれないが、特別外国人学生で日本語能力が低い留学生の場合は、彼らの教室外での日本語学習においてチューターの果たす役割は非常に大きい。しかし、現在は日本語教育研究室と留学生のチューターとの接点がほとんどない状況であるため、今後はこの状況を改善し、教室で日本語を教える教師と教室外で留学生の日本語学習を支援するチューターが連携して、留学生に対してよりよい日本語学習支援を提供できる体制を整えていく必要があるだろう。

(2) 多様な教授/学習環境の構築

現在、立教大学で留学生に提供されているのは教室で展開される日本語の

授業のみである。もちろん、教室で行なわれる授業は重要であり、それを一層充実させるための努力を続けなければならない。しかし、授業外でも学生が日本語を学べる様々な環境を整えることも今後必要になってくると思われる。そのための1つの取り組みは先に述べたチューター制度の充実であるが、チューターは24時間留学生支援をするわけではない。そこで、考えられるのが、インターネットの活用である。今後、積極的にインターネット環境を活用することで、立教大学で学ぶ留学生のみならず、学外、海外で日本語を学ぶ学生に対しても、学習環境を提供していきたいと思っている。

(3) 人的ネットワーク、協力体制の整備

留学生が日本語の教室外で日本語を使って豊富な体験をすることができるような環境を作るためには、日本語教育研究室のみならず、様々な人々の協力が必要である。現在も、立教大学の卒業生の方々や国際センターの方々などに支えられて、留学生が教室外で様々な活動に参加している。そして、そのような活動を通して留学生が体験することは、彼らにとって本当に意義があることだと感じている。したがって、今後はさらに人のネットワークを広げ、協力体制を整えていくことで、教室外での留学生の日本語学習を支援し、促進できる環境を作っていかなければ

ればいけないと思っている。

5. おわりに

現在、日本語教育研究室では教材開発を初めとして様々な改善を行なっている。その中で、新しいシラバスやテキストを導入しての授業が滞りなく行なわれているのは、教員はもちろんのこと、卒業生や様々な事務局の方など立教大学の日本語教育に関わる多くの人々の協力と支援があるからだと痛感している。そして、今回の寄稿で、そのような方々に対して少しでも感謝の意を示すことができればと思っている。立教大学で学ぶ多様な留学生に対して、質の高い日本語教育を提供することは簡単ではない。しかし、立教大学で学ぶ留学生や日本語教育研究室を支援してくださる人々の期待に応えるためにも、よりよい日本語教育カリキュラムを作り上げるために、更に努力を続けていかなければならないと思っている。

いけだ のぶこ

(日本語教育研究室主任,
本学経済学部教授)